芹霊と
１００人の元カレ
４

芹霊と１００人の元カレ　４

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20206486

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 芹霊, ♡喘ぎ, おほ喘ぎ, 将霊(別れています)

芹霊前提、師匠総受けです。将霊（別れています）が含まれます。今回は♡喘ぎ、軽度のおほ喘ぎがあります。倫理がアレです。良ければお付き合いください🌸

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

ネタバレ
芹霊は別れません

Table of Contents

芹霊と１００人の元カレ　４

このお話は、１００人の男に捨てられた師匠と、真っ直ぐな芹沢さんが、元カレたちを乗り越えて幸せな未来を掴むお話です。

※

「霊幻さん、明日の午後ってちょっと抜けても大丈夫ですか？３時間ぐらい」
スマホでヨシフからのメッセージを見ながら、芹沢が霊幻に訊く。
「自衛隊のバイト？」
「そうです。なんか山奥の不法投棄が酷くて撤去するそうなんですけど、重機や人の手が入れづらいそうで、念動力持ちの人に来て欲しいとかで」
「ほーん、気を付けてな。お前破傷風ワクチン最近打ったか？」
芹沢は聞き慣れない言葉にキョトンとする。
「打ってないなら今日打ちに行っとけ。ゴミ処理するなら必須だから」
「えっでもこれまでも相談所でゴミ輸送とかして来ましたし……」
「ウチでやってるのと自衛隊みたいなお上がやるようなのとじゃ規模が違ぇよ。注射嫌いでも打っとけ」
「いや別に嫌って訳じゃないですけど……」
めんどくさいな、と思うのは事実だ。
（保険証今日持ってたっけ？）
ぼんやりと芹沢は財布の中身を思い出す。
「……はい、はい、成人です。３６才。私は事業主です。ええ、ゴミ清掃活動をするので……四時にいけますか？助かります〜」
ぴ、と霊幻が携帯を切る。
「ここの小児科、今日打ってくれるって。受付四時だから後１時間経ったらココ出た方がいい」
「小児科ですか！？！？」

「丁度今日破傷風ワクチン開ける予定だから、ってさ。あ、どうせなら実家寄って母子手帳受け取ってくるか？出来れば持って来て欲しいんだって」
「めんどくさ……」
「おい心の声漏れてるぞ」
とはいえ雇い主からの半強制だ。

しぶしぶ芹沢は実家に向かう。

「母ちゃん、俺の母子手帳ってある？」
「ええ、ちょっと待ってね」
パタパタとスリッパが遠ざかる音がして、すぐに戻ってくる。
「はい、どうぞ」
渡そうとして、芹沢の母はちょっと躊躇う。
「？母ちゃん、どうしたの？」
「いえ、ちょっとだけ……」
母は頭を軽く振る。
「何でも無いわ」
そして寂しそうに微笑んで、芹沢の手にぎゅっと握らせた。

小児科に着いて。
（暇だな……）
ペラペラと芹沢は母子手帳をめくる。
（母子手帳ってこんなことも書いてあるのか）
生まれた日時。何グラムで生まれたのか。どの病院で生まれたのか。
芹沢には書いてある意味が分からなかったが、物珍しさで手がページを繰る。
（何ヶ月で寝返りを打ちました……）
（何ヶ月でハイハイしました……）
字面から母の喜びが伝わるようで、芹沢はおもはゆく、嬉しくなってきた。
所々挟まっている色褪せた写真も面白い。自分だと言われてみれ

ば、何処となく面影があるのが興味深かった。
最後のページ。白紙の欄に『生まれて来てくれてありがとう』と書かれていて、芹沢は瞠目してしまった。
（俺なんて生まれて来なければ良かった、と何度思っただろう）
その度に、無力ながらも、必死に自分という存在に寄り添おうとしていた母を思い出して切なくなる。
（まとまったお金が入ったら、親孝行もしよう）
ひら、と最後のページからつるつるとした真っ白な紙が落ちた。
「？」
「芹沢さーん、診察室へどうぞ〜」
「あ、はい」
白い紙を取り敢えず拾って芹沢は診察室へ入る。
「まず、これまでに打った予防接種確認させてもらうね」
小柄なほわほわした福禄寿みたいなおじいさんがにこにこと笑って、芹沢から母子手帳をおしいただく。
「うん……うん、すごいねえ、お母さん、当時自費でしか打てないのも全部打ってるねえ」
「はあ」
「感謝したほうがいいよぉ。今の雇用主さんにもね。就業中に予防接種打たしてくれるなんてまず無いからねぇ」
「……そうなんですか」
霊幻が褒められると、なんとなく芹沢も気分が良くなる。
「あの、これ、なんだか分かりますか？」
芹沢は先ほど母子手帳から落ちた白い紙を医師に見せた。
「ああ、これは……エコーだね」
「エコー？」
「お腹の中の胎児を、エコーで見た時の写真だよ。あれは感熱紙のことが多いから、時間が経つと消えてしまうんだ。……君は生まれる前から、お母さんに大事にされていたんだねぇ」
「……っ、はい……！」
うるむ涙を芹沢が必死に飲み込んでいる間に、ぷすっと医師は注射を終わらせた。
「ゴミ清掃するんだって？大変だねえ」

「あ、はい。自衛隊の初任務で。俺はいいかなって思うんですけど、上司が打っとけって」
「本当にいい上司さんだねえ。ほう、陸軍かい？」
「あ、はい、陸上自衛隊です。俺は予備自衛官なんですけど……」
「……ふむ。予備役か。海外に行く予定はあるのかい？」
「あ、有り得るって言ってました」
さっと医師の顔色が変わる。
「なら、明後日も来なさい。少なくとも黄熱や狂犬病、ＭＲワクチンは打っておこう。君はハスミワクチンの世代だったからね」
「はあ」
「マラリアの予防薬も処方してあげよう。……私はルソン島に派遣された事があってね。たくさん、たくさん仲間を看取ったよ。そのほとんどが今では予防接種で何とかなる病気だった」
医師の顔が戦士の顔に一瞬戻る。
「……予防接種の料金は軍に請求するといい。何、ごねたら私にいいたまえ。陸軍の何人かは私の弟子だからね」
またぽやぽやした顔に戻って、医師はお大事に、と芹沢に小さな手をふった。

※

「おー、お帰り。あのじいさん元軍属だから親身になってくれたろ」
「……知ってたんですか」
「まあな。ウチの常連だからな。……ん？機嫌良いな？」
まあ、とにへと芹沢は笑う。いっぱい褒めて貰った。母と霊幻のことを。
めんどくさいと思ったけど、行ってよかった、と芹沢は噛み締めた。

※

「……あんなところにどうやってゴミ捨てたんだろ」

崖の途中に張り出した舞台の所に、冷蔵庫や洗濯機、果ては車まで色んなものが乗せられている。
「まー、崖の上から落としたんだろうな。……芹沢、トラックまで運べそうか？」
ヨシフの言葉に、芹沢は頷いて手をかざす。
問題なく運べそうだった。
「いけます」
「そうか、助かる。他のメンバーは崖下の細々したゴミをトラックに運んでくれ」
うへぇ、と超能力部隊のメンバーから悲鳴が上がった。細々としたゴミ拾いは中々に疲れるのである。
苦笑しながら、芹沢はゆっくり大型ゴミを超能力で運んでいく。
「いてっ！？」
後ろから声が上がった。
「うわー、釘踏み抜いちゃったよ……」
「何！？」
笑い話のように話す男に、ヨシフが血相を変えて歩み寄る。
「作業靴を貫通するような釘だと……お前は今すぐ下がって後衛に病院連れて行ってもらえ。みんな注意しろ、この辺りまで不法投棄されてるぞ……！」
「お、おおげさっすよ」
あわあわと慌てる男に、ヨシフは眉を寄せる。
「破傷風の怖さ知らねえのかお前は。どうせ予備自衛官身分のやつは予防接種受けてねえだろ。いいから、今すぐ、病院だ！！」
（あ）
芹沢は目を見張る。
「各自、足元のゴミ拾いからだ！」
「あの、ヨシフさん」
「なんだ芹沢」
「予防接種って自衛隊に負担して貰えますか」
「……ああ、全額補助出るぞ。領収書持って来い」
「良かった」
芹沢は足元に手をかざす。ぶわ、と無数のゴミが宙に浮かび上がっ

た。
「おー、さすが」
「目に見える物だけ回収しました。細かい物は探知できる方にお願いしたいです」
「了解だ」
ざわざわと他の超能力者たちが「すげえぞ」「誰だあれ」と騒いでる。
ちょっと照れながらも、芹沢は淡々と粗大ゴミを運んだ。

※

「霊幻さん、ありがとうございました」
「？何が？」
霊幻はお祓いグラフィックから顔を上げずに聞き返す。
「……いえ」
（この人にとっては、息をするように自然なことなんだ）
芹沢はゆらゆらと空調で揺れる霊幻の前髪を眩しげに見つめる。
（息をするように、他人を思いやれる。そんなこの人を、俺は好きになった）
ぎゅ、と予防接種の領収書を、芹沢は握りしめた。

※

『すまん、緊急の任務が入った。出来るだけ強力な超能力者を連れて行きたい。今日これから出発できるか？報酬ははずむぞ』
芹沢はスマホを耳に当てながら、チラッとベッドに裸で寝そべる霊幻を見る。
「ちょっと待ってください」
芹沢はスマホを下げた。
「霊幻さん、今からちょっと自衛隊のバイトに行きたいんですが……」
「えらく急だな。数日かかるか？」
芹沢はヨシフに訊く。

「……数日かかる可能性があるそうです」
「お前は行きたいんだな？」
「困ってるみたいだし……行ってあげたいです」
「分かった」
霊幻は携帯を取るために立ち上がる。ヘルプの調整を付けるのだ。
「行ってこい。気をつけてな」
「はい……！」
芹沢はヨシフに是の返事をした。

※

「これからの任務の内容については他言無用で頼む。理由は色々だ」
自衛隊の輸送機に乗りながら、ヨシフは超能力者部隊の面々に紙の地図を配る。
「これから◯◯のアビド村に全員向かう。日本人ジャーナリストが退去命令を無視して居続けているらしい。その救助に向かった陸自の先遣隊５名が……消息を絶った。俺たちの任務はこの５名の捜索支援だ。過激なテロ組織が潜伏している村だ。事態は一刻を争う。が、今動きをマスコミに報道されるのはまずい。このまま闇に乗じて米軍基地に入り、そこから米軍機で現地入りする。……質問は？」
「「「「「「ありません」」」」」」
「よし。各自戦闘服に着替えたら、横須賀まで仮眠していてくれ。以上だ」
言い切って、ヨシフはすぐ座席に座って仮眠を取り始めた。
各々ラフな格好をしていた超能力者たちが戦闘服を着て軍属に変身していく。
（大変なことになってるじゃないか）
揺れる狭いＵ－４の中、芹沢はどこか焦った気持ちでゴソゴソと着替えていた。

現地に着いて。

「じゃ、じゃぱんぐらんどせるふでぃふぇんすふぉーす、すぺしゃるてくにかるすたっふ、かつやせりざわ、りてりんかなる（二等陸佐）」
緊張した声で芹沢がヨシフに言われた身分を口にする。
「I' chief, Joseph. So?（取りまとめをしている、ヨシフだ。それで、今どうなってる？）」
「Fuck'in terroristen get' friends there. Fucker has mercenary, so FREEZED.（友軍はあそこに捕えられている。敵は傭兵を雇っていて、膠着状態になってしまっている）」
「Okey, we' coming.（了解した。後は我々に任せてくれ）」
「Thank fuck.（恩に着る）」
「Not at all!（お互い様だ）」
疲れた様子の米軍兵士を励ましながら、ヨシフは超能力部隊に指示をする。
「右のあの建物に自衛隊員が捕えられている。場を制圧したら自衛隊員が突入するから、俺たちはテロリストの無力化を行うぞ」
芹沢は焦る。早く助けてあげたい。
「俺だったら今すぐ突入できます！人命優先でしょう！？」
「！馬鹿命令を聞け！！残りメンバーはバリア張ってその場で待機！！」
バリアを張りながら飛び出した芹沢をヨシフは慌てて追いかける。
「っ助けに来ました！！もうだいじょう……ぶ……」
激しい銃弾をバリアで跳ね返しながら建物の扉を開いた芹沢は、絶句する。
「あ……あ……」
後退り動揺にバリアを解除してしまった芹沢を庇うために、ヨシフは煙の盾を展開した。
「！芹沢、見るな！！早く退却しろ！！」
ヨシフは顔を歪めて芹沢の襟首を引っ張る。よろよろと芹沢は尻もちをついた。
「こんな……なんて、なんて酷いことを……こんな……！」
ドン、と地震のような音が辺りに響き渡る。

「……さっき見えていたテロリストは潰しました。引き続き制圧しましょう」
「いいから、お前は下がれ」
「ヨシフさん……！」
「怒りに目が眩んだ超能力者なんて危なくて仕方ねぇよ！いいから下がれ！」
芹沢は黙り込んで、大人しくヨシフの指示に従った。

※

「……大丈夫か」
静岡基地に帰ってきて、休憩室でずっと芹沢は項垂れている。
ヨシフは暖かいココアの缶を渡し、自分はブラックコーヒーの缶を開けた。
「大丈夫です」
「嘘は良くねぇな」
ゆるゆると顔を上げて芹沢は苦笑する。
「なんで……なんで真面目に働いてただけの人たちがあんな目に遭わなくちゃいけないんですかね……」
「軍隊じゃままあることだよ」
「もっと俺が早く行っていたら……助けられたかもしれない……」
「俺たちゃ国際法無視のヒーローじゃない。そういう訳にはいかないんだよ」
ふう、とヨシフはため息をつく。
「芹沢、頼みがある。現場では俺の命令を守って欲しい」
「ヨシフさん……」
「お前は出来る事が多い。じれったくなることもあると思うが、俺は不安定になりやすい超能力者の精神面のサポートもしているんだ」
「……」
「お前は大事な戦力だ。お前の力で何百人という人間が救える。だからこそ、潰したくない。分かってくれるか？」
「……分かりました。すみませんでした、言うこと聞かなく

て……」
「いいさ。気にすんな。……お前、すぐヤらせてくれる女っているか？」
「は、え？」
突然シモネタをぶっこまれて芹沢は戸惑う。
「いないんだったら俺のオススメの店連れてってやるよ。お前のソレは一種の戦争後遺症だ。何発かやりゃあ良くなる。……どうする？」
芹沢は苦笑して首を振る。
「恋人が居るんで大丈夫です」
「そうか。いいか、帰ったらすぐ抱かせて貰えよ」
「ハイ」
念を押すヨシフに、もう一度芹沢は苦笑した。

※

「ただいま戻りました」
「どわぁっ！？音も無く後ろに立つなよ！！」
「そんなつもりは無かったんですが……」
芹沢の顔を見てエクボがソファーから立ち上がる。
「さんきゅーエクボ。今日の報酬はまた後日」
「おー」
ひら、と手を振って退室していった。
「芹沢、顔色悪いぞ？大丈夫か？」
「霊幻さん」
ぎゅ、と芹沢は霊幻の手を上から覆って握る。
「……！」
色濃い性の匂いに、霊幻は思わず椅子ごと後ずさった。
「すみません。抱きたい」
「こ、ここでか？せめてホテル行って……ッ」
ぐいと腕を引かれて立ち上がらせられ、ぎゅうと芹沢が霊幻をデスク越しに抱きしめる。
「……」

芹沢らしからぬ行動に霊幻はそっと背中を手で抱きしめ返した。
「カギ、締めて……札ひっくり返して、できれば音、外に漏れないようにしてくれ」
「！……いいんですか？」
「いいよ」
──自衛隊の任務でなんかあったんだろ。時々ヨシフもそうなってたから。
その言葉は霊幻はそっと飲み込む。
「こっち回って来いよ」
「はい」
しゅるりとネクタイを外して上着をソファーに投げながら、芹沢が霊幻の方にデスクを回り込む。
「霊幻さん」
軽く霊幻の肩を押して、またビジネスチェアーに座らせた。
「舐めてください」
芹沢はカチャカチャとベルトを外して前をくつろげ、下着をずらして半勃ちの逸物を取り出す。
「ん……」
カコ、とデスクチェアーを1番下まで下げた霊幻が、舌を伸ばして口をパカリと開けたら、勢いよく芹沢はその口の中に突っ込んだ。
「あがっ！」
喉奥を突かれた衝撃に霊幻の足が跳ねる。
「ぉご、んぉ、かは……っ！」
ヘッドレストに押さえつけられた頭をオナホのように使われる。逃げ場のない霊幻は肘置きを掴んで耐えながら、必死に芹沢の性器に舌をからめた。
「はぁっ……はぁっ……」
息苦しさに濁った目でうろんに芹沢を見上げながら、トロトロと生理的な涙を流す霊幻に、芹沢はどうしようもなく興奮する。
殺戮現場で必死に抑えた凶暴性が、今は芹沢を支配していた。
「霊幻さん……霊幻さんッ……」
芹沢が霊幻の顔を抑えて怒張を捩じ込む度に、喉から粘ついた水音が響く。

「あ゛っ♡お゛っ♡お゛ごっ♡」
がぽっ、がぽっと音を立てて喉に打ち込む度に、ずん、ずんと快感の波が芹沢の中を上がってくる。
「霊幻さん、出そ……ッ」
がた、と壁まで追いやられた椅子の背もたれが、ガシャンとブラインドを鳴らす。
「ん……ッ！」
ごり、と喉奥をこねられて、そこに叩きつけられた精液をなんとか霊幻は飲み込んだ。
「ぇほっ……」
ずるりと唾液まみれの性器を口から抜かれて、霊幻が咳き込む。
「れいげんさん……」
芹沢が息を荒くしながら、先端に残った精液をリップグロスのように霊幻の唇に塗り付ける。
「ん……」
霊幻は倒錯的な行為にゾクゾクしながら、ペロリと舐めた芹沢の先端を咥えて、ヂュルリと吸った。
「ゔっ……！」
尿道に残った精液を吸い上げられて芹沢は思わず霊幻の頭を掴む。
指の隙間から溢れる金色（こんじき）に、眩暈がした。
「霊幻さん、立って。お尻こっちに突き出して下さい」
「……こうか？」
霊幻はノートパソコンをどけたデスクに肘を置いて、腰を芹沢に突き出す。
「はぁー、はぁー……っ」
芹沢はまろい霊幻のスーツに包まれた尻を両手で掴んだ。
「んッ」
尻たぶを撫で回し、揉み上げ、顔をうずめる。
「すぅーっ……」
「馬鹿やめろ！」
嗅いだら流石に霊幻に止められた。
「すいません」
芹沢は覆い被さるように霊幻の前に手を伸ばし、ベルトを外してず

る、とズボンと下着を引っ張った。
すとん、と下着とズボンが霊幻の足元に落ちる。
「せりざわっ……これ、使ってくれ……」
霊幻はスーツのポケットから小分けタイプのローションとコンドームを取り出して芹沢に渡す。
芹沢はローションの封を切って、手のひらにドロリと出した。
「ん、んっ……」
ぬるぬると塗り込むようにアナルに芹沢の指が潜り込んできて、霊幻は鼻にかかった声を出す。
「あ！」
無防備に垂れ下がっていた性器をぬるりと握り込まれ、霊幻は背中をしならせた。
「バックからだとちんこも弄りやすくていいですね」
「あ、あっ……あァっ……！」
前立腺の辺りを指で押されながら、にゅるにゅると陰茎をしごかれて、ガクガクと霊幻の膝が震える。
「……そろそろいいかな。ほら、しっかり立っててくださいよ」
芹沢はコンドームを付けて、霊幻の骨盤を掴んで一気に奥まで押し入った。
「ぁ―――っ♡♡♡」
かく、と霊幻の肘がくずおれて、デスクに上半身を預ける形になる。
「はっ、はぁっ、っぅん……♡」
ずちゅ、ずちゅと何度も奥まで穿たれて、思わず霊幻は縋るようにデスクの端を掴んだ。
「霊幻さん」
「っ、ぅあ！？……っ♡」
ごり、とカリの張った先端で前立腺をえぐられてビクンと霊幻が跳ねる。
「乳首自分でいじってくださいよ。この体制だとそこまで手が届かないんで」
ぱぢゅ、ぱぢゅと中を犯しながら芹沢が言う。
「わ、かった」

机の端から固まった手を、握ったり開いたりしながら離して、霊幻はそろりそろりと胸に近づける。
「ん、っ♡」
カリ、と指で先端を引っ掻いて、喉をひくりと上下させた。
「れいげんさん、気持ちいいですか？」
「ンっ……っぁ、イイ……っ♡」
霊幻は爪先で乳首をシャツの上からいじめながら、ゆらゆらと腰を動かす。
「そういう触り方が好きなんですね？今度はそうやって触ってあげますからね」
「ひぃっ、あ♡」
ごり、と奥を押されて、霊幻が目を見開く。
「おっおくぅうっ♡ヤ、ヤバ……っ♡」
「手が止まってますよ」
「う、ぅんっ……♡」
必死に乳首をいじりながら、霊幻ははぁはぁと息を逃して脳までクるような刺激を追いかける。
「っせりざわぁっ♡クるっ、すごいのくるぅ……っ！♡♡♡」
「いいですよ、イって……！」
「あ、あ、あ、あ、あぁああぁあ──っっっ♡♡♡♡♡♡」
ばん、と理性と身体が強制的に引き剥がされるような、快楽。じんじんと痺れる身体に霊幻の目の前がチカチカする。
「ぁ、は……♡♡♡」
ガクガクと震える身体に芹沢もたまらず、蠕動のままに精液を搾り取らせた。
「はぁっ、すごいな……」
ずるりと逸物を引き抜いた芹沢は霊幻の性器がまだ勃起しているのに気がつく。
「あれ？射精してないじゃないですか」
「！らめっ、いま、さわんにゃっ……ァアアアァアっ！！！♡♡♡♡♡♡」
こしこしと無遠慮にしごかれて、霊幻は勢いよく射精する。
がく、と腰が抜けて、へたへたと精液の上に崩れ落ちた。

「ばかぁ……っ♡」
「すみません……あの、続きいいですか？」
芹沢のもう復活している怒張を見て、霊幻は目を丸くする。
「……掃除しやすいから、施術室で、な」
「はいっ」
嬉しそうな芹沢の返事を、霊幻は気の遠くなる思いで聞いていた。

※

「すみません……」
「いやもういいよ何回謝るんだよ」
相談所のソファーで気だるげにコンビニプリンを頬張る霊幻に芹沢は小さくなる。
「今思えば酷いことしちゃったかなって……本当にすいません」
「あのなあ、芹沢」
びし、と霊幻はプラスチックスプーンで芹沢を指す。
「謝ったら許されると思うなよ。人間、やったことは自分で責任取るしかねぇんだよ」
「うっ」
「俺は気にしてないんだからお前も気にすんな」
「……はい」
「……ま、オトシマエって考え方もある。俺は今日は事務所に泊まるから、荷物アパートから取ってきてくれるか？」
「任せてください！」
「冷蔵庫に夜食べようと思ってた賞味期限ギリギリの弁当があるから、それ取ってきてくれ。いやーあれだけが気になって……」
「行ってきます！」
芹沢は霊幻からカギを受け取って足早に歩き出す。スマホの経路案内を見ながら、霊幻のアパートを目指した。
（あった）
階段を登って、ドアを開ける。
暗い霊幻の部屋は、微かにアロマの匂いが漂っていて、雑多な雰囲気があった。濃く感じる霊幻の気配に、芹沢は思わずどきっとす

る。
（冷蔵庫は……）
頭を振って、芹沢は靴を脱ぎ捨てて部屋に上がった。ふと、クローゼットが目に入った。
（元カレから服が送られてくるって言ってたな）
思わず手を伸ばす。
が。
開けようとして、やめた。
（…………勝手に見るのは良くない）
芹沢はまた頭を振ってまっすぐ台所に向かう。
冷蔵庫から袋に入ったままの弁当を取り出し、洗面室の着替えとタオルを掴んで弁当の袋に入れた。

※

「なんかアメリカ絡みの任務多いですね」
アメリカ、某州。連続爆破事件の新たな予告があったとかで、芹沢たちは駆り出されていた。
「同盟国だからな。そりゃ他の国より多いさ。空予告が多いらしいが、使われる爆弾が強力な物だから、十分気を付けて──」
か、と閃光が近くのダイナーからほとばしる。
「ッ伏せろ！！」
ヨシフが叫ぶまでもなく、バリアを纏いながらではあるが、芹沢達は爆風で地面に這いつくばらせられていた。
「ッ大変だ……！メシどきのレストランだぞ！？超能力者部隊は救助にあたる！！追加爆破の危険があるから、一般兵は下がってろ！Normal's ge'ou'of'er!!」
「Sir, Ye'sir!（了解です！！）」
米兵や自衛隊の工作兵がヨシフの手信号に退却を始める。
超能力者たちがバリアを纏って走り出した。
「人命最優先だ！怪しい奴がいてもほっておけ、俺たちの仕事じゃねえ！繰り返す、人命最優先だ！！」
「「「「「「了解！！」」」」」」

瓦礫を退け火を一瞬で消し、場は超能力者たちにまたたく間に支配されていく。
「芹沢さんッ！！」
瓦礫をどけて生存者を探していた芹沢を同僚が呼んだ。
「子供が……！！」
芹沢が駆け付けると、大きな瓦礫の下に小さな少年が挟まれていた。
「このままだと潰されます！俺たちの能力じゃ瓦礫を持ち上げられなくて……っ！」
「分かった、俺が瓦礫を持ち上げる！君たちは子供を引っ張り出して！」
「はいッ！……っダメだ待ってください！」
「なに！？」
「子供の足が……瓦礫で切断されてます！瓦礫が傷口を塞いでる！！持ち上げると傷口が開いて一気に血が吹き出します！！」
「！！……そんな、どうしたら……！！」
「子供が潰れないように瓦礫を保持したまま、衛生兵を待つしか……！！」
「……分かった」
汗を流しながら芹沢は大きく息を吐く。
「そうしよう」
「キツいですよ、大丈夫ですか……！？」
「なんとかいけると思う。ここは俺に任せて、君たちは生き残りを探しに行ってくれる？」
「了解です……！！」
仲間が走り去るのを見届け、芹沢は痛みに呻く子供に微笑む。
「ちょっとのがまんだからね」
なんとなく意味は分かるのか、子供は小さく頷いた。
「退避、退避ー！！」
そんな時に、大きな怒鳴り声が響く。
「◯◯ビルで爆弾が見つかった！！破片がここまで飛んでくるぞ！！退避ーっっっっ！！！！」
ぱ、と青空が真っ白に染まって。

この辺りの象徴となっていた高層ビルから、鼓膜が割れるような爆音が轟いた。
「え、っ」
バリアを張って呆然とする芹沢の目の前で、爆風が色んなものを薙ぎ倒していく。
ぐら、とビルが途中から折れて傾いた。
（落ちる──！）
芹沢は思わず手をかざす。ビルの落下は緩やかにはなったが、芹沢の力では止められそうにはない。
（このままじゃ、ビルの中の人が……っ！全力をあっちに向けたら、なんとかなるかも知れないけど……！）
そう、この少年を見捨てて。
芹沢はちらりと少年を見る。ビクリと少年は怯えたように芹沢を見つめた。
「Please, help me...（見捨てないで……）」
か細い声に芹沢の胸が激しく掻きむしられる。
（どうする、どうする、どうするべきだ……ッ！？）
正解は分かっている。何百人のために、この少年には犠牲になってもらうべきだ。
（でも……ッ！！）

芹沢の脳裏に、鮮やかな金色（こんじき）がまたたいた。

（霊幻さんなら、きっとこの子の命を諦めないッ！！）

芹沢は覚悟を決めて歯を食い縛った。
「んぐぐぐぐぐぅ〜ッ！！！！」
超能力の出力を限界以上に上げる。
ぴた、とビルの落下が止まった。
（このまま、ゆっくり、おろして……ッダメだ、頭がクラクラして力の調整が出来ない……！！）
それから何分経っただろうか。
芹沢はぼんやりと、自分の鼻から血が流れているのを感じていた。

（もう、げんか、い……）
だめだ。
（この状態で力が切れたら、みんな死ぬ──……！）
ぐ、と芹沢は自らの霊魂まで能力に変換する決意をする。一気に走馬灯が頭を駆け巡り、何故か母子手帳のことを思い出していた。
（母ちゃん、母ちゃんごめん。俺、帰れないかも。でも……ッ、助けられる人を、俺は見殺せない……っ！なんとか、なんとかゆっくり地上におろして──！）
「ご苦労だった、芹沢」
す、と横からかざされた手が、ビルを軽々と受け取る。
「後は私に任せろ」
芹沢はその見慣れた横顔に目を見開く。
「社長……っ！」
「芹沢大丈夫かっ！！良かった、援軍が間に合ったんだな……！！おい衛生兵！こっちだ！！」
子供の上の瓦礫だけをしっかり保持しながら、芹沢はへたり込む。止血されながら救助される子供が芹沢に何か喋りながら手を振ったので、へらりと笑って手を振り返した。

※

「こりゃあ日本で脳の検査だな……無茶しすぎだよ、お前」
鼻の中をライトで覗き込んで呆れた声を出すヨシフに、芹沢は苦笑する。
「すみません」
「……どうした？」
いつもと違う芹沢の暗い声にヨシフが心配そうに顔を覗き込んでくる。
「やっぱり社長はすごいなぁ、って思ってただけです。……俺は無力だ」
ヨシフのような統率力も、鈴木統一郎のような強大な能力も無い。芹沢は大きいばかりの自分の手に目を落としていた。
「……お前が時間を稼いでくれなければ、私は間に合わなかった」

突然、今まで黙って背を向けていた統一郎が口を開いた。
「私はお前の存在を頼もしく思う。……これからよろしく頼むぞ、芹沢」
「社長……！はいっ！！」
顔に輝きを取り戻した芹沢に、やれやれとヨシフは苦笑した。
「私はもう日本に戻る。ヨシフ、それでいいな？」
「おー、ご苦労さん。今日は家族とゆっくりしてくれや」
「芹沢も私と同じ方法で帰るか？お前なら出来るだろう」
「鈴木は大陸間弾道弾の軌道で帰るからな。２０分ぐらいで日本に着くぞ」
「あ、はい。じゃあ俺もそれで」

やるんじゃなかった、と芹沢は後悔した。

※

「あれ？予定よりかなり早く帰れたんだな。お疲れ様」
「ええ……」
相談所に入って、芹沢は青い顔を笑みに歪める。
「……大丈夫か？」
「いやちょっとジーに酔いまして……」
「待ってろ、ミントティー淹れてやる」
椅子に座って、芹沢は気持ち良くウトウトする。
霊幻が動く音に幸せを噛み締めながら、ああこのために社長は文字通り飛んで帰ったんだな、と納得した。

※

「あ、すまん芹沢。ちょっと残業入った。◯◯さんへの請求書、今日中に送らないと」
「あっはい、分かりました。先に帰って鍋の準備してますね。気を付けて帰ってきてくださいね」
「おお」

芹沢は鞄を身につけて相談所を出る。
「芹沢っ、俺と勝負しろ！！」
そして物陰からまろび出てきた鈴木将にため息をついた。
「そろそろ来るかと思ってたけど……何？将くんは四天王？それとも幹部？」
「幹部だっ！」
「これまだ続くのかぁ……」
「余裕かましてられるのも今のうちだぜ！！いでよ親父！！」
将はばっと手を広げる。
「わ、我々に歯向かうとはいいドキョウダ……」
「めっちゃ目ぇ逸らしてる！！声ちっさ！！」
そこにはスウェットを着た、すごく家で寛いでたっぽい統一郎が立っていた。
「社長めっちゃいい感じに登場したのに台無しじゃないですか！！ちょっと将くん、これはお父さん可哀想だって！！」
「親父は元カレ連合の準構成員だ。霊幻さんの元カレじゃないが手を貸してくれる」
「社長めっちゃ初耳って顔してるけど！？！？てか何人いるの元カレ連合！？！？」
「本構成員の元カレが１００人、ただ片想いしてただけの人間などを入れた準構成員を合わせると1万人だ」
「ばっっかじゃないの！？！？ていうか凄いな霊幻さん！？！？！？！？」
「ふ……元カレは１人見かけたら３０人は居ると思えよ……？」
「それゴ………………その扱いでいいの本当に……？」
このやりとりの間、鈴木統一郎はずっと気まずそうに足元の小石をサンダルでいじっていた。
「ともかく！お前を倒したら俺が霊幻さんと付き合えるルールなんだよな！？」
「そんなルールないけど！？！？」
「行くぞ親父！……どうしたんだよ？」
統一郎は腕を組んで難しそうな顔をしている。
「……将、お前を弄んだひどい男をこらしめたい、と言っていた

な……？」
「そーだよ。霊幻さん、俺が一度振っちゃったからってもう付き合えないって言うんだぜ！？ひどくない！？！？」
統一郎は難しい顔をして黙り込む。
「……それはお前が悪いのでは……？」
「え？親父に善悪の判断なんかできんの？？」
「それは！！それは酷くないか将くん！！ほらお父さん目に見えて落ち込んじゃった！！」
「とにかく」
ブゥン、と将の両手に超能力が宿る。
はっと芹沢はバリアを張る。
「霊幻さんと別れてくれよ、芹沢ぁぁぁあああ！！！」
連続で光弾が飛んでくる。
バチィ、バチィと芹沢はかろうじて跳ね返した。
「ちっ……親父、能力ちょっと寄越せ」
「ｱｯﾊｲ」
「社長！？ダメですよ子供の言いなりになっちゃ！！それじゃ親馬鹿っていうかもはや馬鹿親だ！！」
「芹沢……」
統一郎は腕組みをして、堂々と胸を逸らす。
「息子に頼られるのが嬉しすぎて、どうでも良くなってきた……！！」
「あああこれだからこの人は……！！」
頭を抱えて芹沢は攻撃を避ける。
（元々俺より強い将くんだ、そこに社長まで来られたら……分が悪い……！！）
チラッと芹沢は後ろを確認する。
大きく後ろに飛び退いた芹沢の足元を、将はごっそりと抉り取った。
「逃さねえよ？」
芹沢は冷や汗を流す。

「おいおいおい２対１たぁ、ちょ〜っと卑怯じゃねぇかぁ？」

ふわりと緑色の人魂が、統一郎の前に舞い降りた。
「しまッ……！！」
『俺様の目を見ろ！！』
統一郎の戸惑いに付け込んで、エクボは催眠をかけた。
「……」
統一郎はガッと将を羽交締めにする。
「馬鹿、親父っ、離せッ！！」
「将くん」
ピタ、と鼻先に手をかざして静かに芹沢が話しかける。
「分かってるよね？」
いつでも頭を吹き飛ばせる位置にある手のひらに、将は歯噛みした。
「……降参だ」
その言葉にエクボは、指を鳴らして統一郎の洗脳を解いた。
「……はっ！？私は何を……」
「おい将、決闘はタイマンでって言う元カレ憲章を忘れたのか？」
「元カレ憲章って何！？！？何なの本当に！？！？」
「……忘れちゃいねえよ。……でも相手は芹沢だ。なりふり構っちゃ居られねえだろ……！！俺はどうしても、霊幻さんを、霊幻さんとの日々を取り返したいんだよ……！！」
「ッそこまで愛してたのなら！！」
芹沢の大声に空気が震えた。
「そんなに愛していたのなら、手放すべきじゃなかっただろ……！！」
芹沢の言葉に将は息を呑む。
「泣いてたよ。将くんと別れた時、霊幻さんは泣いてた」
将はうなだれた。
「泣いてたよ……」
「……なあ、将。父さんは母さんといっぱい喧嘩するがな、」
統一郎は諭すように息子に話しかける。
「『別れる』の一言だけは、一度も言ったことは無い。２人とも、……一度もだ」

「……親父、悪いけど先に帰っててくれ」
統一郎が立ち去り、ずっと黙りこくっていた将がポケットからストラップを取り出して芹沢に差し出す。
「芹沢、これお前にやるわ」
芹沢は黙ってそれを受け取る。
「もう少し俺が我慢できてたらなぁ……。芹沢、霊幻さんのこと、頼んだぜ」
立ち去る将を見送りながら、芹沢は手の中の守りが込められた柴犬のストラップを、そっと握りしめていた。

※

「霊幻さん！久しぶりに手伝いに来たぜ！！」
「なんかもう予想付きすぎて驚きもしなくなってきた」
翌日、将は元気に相談所に遊びに来ていた。
「あ、そういえばエクボくん、昨日はありがとう」
芹沢はふよふよと浮かぶエクボに礼を言う。
「やり過ぎの身内を止めに行っただけだ。勘違いすんなよ！？お前のためじゃないからな！？！？」
「はいはい」
そのやり取りをほほえましそうに霊幻が見ていたので、芹沢は霊幻に微笑み返した。

続